

第2章 地域における実践者の取り組み

第1節「多様な主体と共創するまちづくりに向けて

～関係人口と定住人口の連携・協働の今後の展開とその可能性～

加留部 貴行 氏（NPO 法人日本ファシリテーション協会フェロー
・九州大学大学院客員教授）

（第1回研究会でご講演いただいた内容をご確認いただき掲載しています。）

1. はじめに（自己紹介）

私は1967年生まれの58歳で、元々は福岡県宮若市出身ですが、現在は福岡市と佐賀市の二拠点生活をしています。私の自宅は福岡にありますが、妻が佐賀大学医学部看護学科の教員をしている関係で、佐賀市にも拠点を持っており、現在は佐賀で暮らしてすっかりなじんできました。二拠点生活から勢い余って三拠点目としたのが、後ほどご紹介する「松梅ランチ」という場所です。

私は元々都市ガス会社に在籍していましたが、学生時代から村おこし・まちづくりに興味があり、ボランティア・NPOに活動を広げてきました。そうした活動が高じて福岡市に出向となり、NPO・ボランティア支援推進専門員を務めた時期もあり、民間の立場から公務員として市長部局に入ってさまざまな支援策に携わってきました。2011年にガス会社を退職してフリーランスとなり、15年目になります。企業の間がNPO、行政職員、大学教員をやっているの、「ひとり産学官民連携」になってしまったとよく申し上げます。

現在はNPO 法人日本ファシリテーション協会のフェローや、福岡県大野城市社会福祉協議会のボランティアセンター運営委員長など務めており、私個人としては人がイキイキと暮らせる「身の丈の地域社会づくり」を追いかけ続けています。特にファシリテーションが専門なので、それを生かした現場として、会議の運営や教育研修、多職種連携を支援する仕事をしています。

2. 今、松梅ランチで起こっていること

（1）松梅ランチ誕生の経緯

自己紹介の延長線上の話として現場のことをお話します。

佐賀市の山間部、合併前の旧大和町に松梅という地区があります。そこにある築30年の家が空き家になりかけていたのをご縁があって取得し、リノベーションして、2024年の正月にオープンしました。

松梅という地区は、人口が約840人と佐賀市内の小学校単位では最も少ない広域限界集落であり、19の単位自治会を抱えています。地区内に小中一貫校があるのですが、全校生徒数が80人を切っており、昨年の新1年生は2人、今年は5人という少子化の真ただ中にある学校です。その隣の家を取得しました。

ブランチを取得した経緯は、2022年ごろ、私と妻が55歳になったときに、自分たちの10年後のことを考えて、後々は地域のことをやろうと考えていたものを、少し早いタイミングで慣れて慣れてもらえる関係をつくろうとして第三の拠点をつくることに踏み切りました。妻が理事を務めるNPO法人空家・空地活用サポートSAGAに相談して物件を紹介していただき、2022年12月に購入しました。翌年早速、地域の自治会長にご挨拶に行き、地元・井手地区の自治会に加入し、そして松梅まちづくり協議会にも7月にはご挨拶に上がりました。10月からリノベーションをかけて、2024年1月に「松梅ブランチ」がオープンしたわけです。

夫婦の間ではこの場所を「サード&フォースプレイスパーク」と位置付けました。サードプレイスというのは、自宅（ファーストプレイス）、職場や学校（セカンドプレイス）に対し、個人にとって居心地の良い場所のことを指します。また米国では、サードプレイスは同質的な人が集まる傾向が強いのにに対し、異質な人がつながりをつくったり、起業を目指す人が集まったりするようなフォースプレイスも形成されつつあります。

この建物は周囲を山に囲まれ、近くに川も流れているため、公園のようなイメージを持って「松梅ブランチ」と名付けました。ブランチには「止まり木」という意味があり、地域の暮らし、対話や学び、ここを訪れる人たちの背景になる社会活動がごちゃ混ぜに存在するような場になればと願っています。

（2）松梅ブランチでの活動概要

ブランチがある井手地区自治会はわれわれを含めて23戸しかなく、住民のほとんどが高齢者で、空き家が2件あるというエリアです。住民のほとんどが通天寺というお寺の檀家であり、井手天満宮の氏子であるという、農村部の典型的なコミュニティのつくられ方をしています。

松梅ブランチは原則土日祝日に開放し、特に何かイベントをわいわいやるわけではなく、この場所を地域に開放するというスタンスで臨んでいます。最近では地域の方にはかなり寄っていただいて、いろいろな相談事をされたり、農家が多いものですから作物を持ってきていただいたりして関係が構築されています。1年半たって地域からかなり認知され、この場所を貸してほしいという話も増えてきました。また、敷地内にあるプレハブ小屋を改修した囲炉裏部屋が間もなく竣工し、秋にオープンする予定です。

この場所を初めて貸し出したのは、2024年7月の「おやこ写真教室」のときでした。松梅地区内外の親子と一緒に写真を撮りながら散策を楽しみ、ブランチにあるプロジェクターとスクリーンに映しながらおしゃべりをしました。こうした有料の企画は近くの公立の公民館や学校ではできないので、いわゆる民間

の公民館のようなイメージでランチを使っていたいただきました。

また育友会（PTA）が地区の体育祭や文化祭の後に集まる場所が欲しいということで、「松梅ランチ・カフェ」を2024年9月に実施しました。松梅の小中一貫校は3分の2が純粋に松梅の子ですが、3分の1が越境組ですので、そうした方々が集まりやすい場として使っていたいただきました。

地区最大の行事である「かかしまつり」が毎年10月23日～11月23日に開催されています。地区全体で100体以上のかかしが飾られるのですが、2023年は諸般の事情で立てられなくなったかかしをランチの敷地内で飾らせてほしいという依頼があり、まち協のメンバーによって設置されました。これは地区の人たちにランチを知ってもらい、地域の人たちとの関係づくりを通じて私たちの活動が広がる非常にいいきっかけになったと思っています。さらに2024年には、ランチ前の田んぼが耕作放棄地になったため、松梅保育所の子どもたちと佐賀大学生、まち協のメンバーで一緒にかかし作りをすることになり、子どもたちのアイデアで夏祭りの風景をかかしで表現しました。

隣の小中一貫校からもお話を頂いています。ある日、人権学習の時間で何かできないかという依頼が妻のところであり、先生たちと相談した結果、子どもたちがいろいろな大人としゃべる「トークフォークダンス」を行いました。小中一貫校の子たちは9年間ほぼ同じメンバーで過ごすので、いろいろな人と話す機会があまりありません。フォークダンスのように二重の輪を作り、外側は子どもたち、内側は大人が座ってペアで会話することで、多様な大人たちと子どもたちがコミュニケーションを育む場をつくりました。

それから、地域で開催するのが難しくなってきた餅つき大会を、通天寺と私たちで実行委員会を組織して開催したり、農家の女性たちの健康に関する研修会を実施したりもしています。全ては地域の方々からのご相談や何気ない会話の中から出てきた話をきっかけに始まったものばかりです。

3. 地域目線でDAOをどのように捉えるのか

（1）DAOは大丈夫か

先ほど申し上げたように私ども夫婦は松梅では外の間人であり、そこに定住しているわけではないのですが、地域の方と一緒に足かけ2年ぐらい活動してきました。そうした立ち位置から見たときに、DAO（分散型自律組織）は大丈夫かと思うところが5点ほどあります。

まず1点目に、そもそもあなたは誰なのかということです。この組織自体が一体何者なのか、どういう主体なのか全く分からないのです。

2点目に、これは誰のため、何のためにやるのかというのが分かりません。もちろん地域起点だろうとは思っているのですが、本当かなというところがあつたりす

るわけです。

3点目に、地域でよくあるのは、外の間人が地域に相談なく勝手に進めたり決めたりしていないか、面倒くさがらずに内側の間人と対話してくれるのかということです。実際、私も松梅に関わったときに地元の方々と話をすると、「今の暮らしの延長線上を求めている」と伺ったので、私たち外から来た間人が好き勝手にわちゃわちゃとやるよりは、皆さんの状況に合わせてやっていくというスタンスで臨み、それが今のところ良い方向に向かっていると感じています。

4点目に、いつまで、どこまで関わるつもりかということです。当てにしていたら途中で急にいなくなったりして、そのあたりがよく分からないのです。

5点目に、どこまで本気なのかということです。やりっ放しにならないだろうかという心配があります。皆さんは外から仕事で来られるわけですが、地元の間人は実際に住んでいるわけで、暮らしと仕事がどのようになじんでいくのかというところは心配しながら見ているところがあります。

これらは実際に携わっている方には非常に無礼な問いかけになるかもしれませんが、このように感じているところもあることはご理解いただきたいわけです。というのも、自律型組織はそれぞれがそれぞれの役割を担いながら関わるのですが、分担的に活動する場合と連携的に活動する場合とでやり方に差異があると思うのです。

分担とは、その地域に対して専門性を持った人がおのおのの立ち位置から関わるということです。従って、それぞれがそれぞれからしか見えないので横のつながりは意外と薄く、分担が進み過ぎると分断を生むケースもあります。一方、連携とは、ある段階までは一人の専門家でもできるけれども、あとは次の他の人につないでいって、地域が到達したいゴールに外の間人たちがみんなと一緒に連れていくことです。外から関わる人同士がきちんとお互いに連絡を取り合って地域に向き合っているか、もちろん地域の内側の間人もやりとりがきちんとできているのかどうかは気になるケースが散見されます。

(2) 管理と支援のバランス

また外から関わると、限られた時間と空間と予算と人員の中で物事を進めなければならないので、うまく管理して仕切りたいと考えがちです。特にエンドを切られたり、成果を出せと言われてたりするとなおのことそうなりがちです。そのような管理だけではなくて、支援することで相手のやる気をどう引き出せるかを考える必要があると思っています。

舘岡康雄さんは『利他性の経済学』という著書の中で、管理と支援の本質的な違いについて述べています。それによると、行為者を外部の間人、被行為者を内部（地元）の間人と置いたときに、管理というのは自分（外部）のことを知らせ

て相手（内部）を変えることで外部の意向を果たすことを指します。それはもちろん必要なことだと思うのですが、そればかりやっていると内部の人間はやらされ感満載になってしまいます。ただ、知らないこと、分からないことを教えてもらうのは大事ですから、そういう意味では管理的な要素も必要だと思います。

そこに支援の考え方を入れると少し変わってきて、外部からすれば相手（内部）のことをちゃんと知って、自分を変えることによって相手の意図を果たすことになります。つまり、外部の人間にはいろいろな思惑や都合があるかもしれないけれども、内部の人間にもいろいろなニーズや主訴があるということです。そうすると、内部の人間は自分のことを知ってもらって、相手に変わってもらって、自分の意図が果たされるので満足感が残るでしょう。だからといって支援ばかりしていると、外部の人間のいろいろなことを提供しようとする力が活かされないので、目的に合わせて管理と支援のバランスを取ることが重要だと思います。

館岡先生は、管理は自分から出発して相手を変える行動様式であり、支援は相手から出発して自分を変える行動様式であるとおっしゃっています。結局、何を起点に、誰を起点に物事を考えるのかが、外部から地元に関わり合いを持つときに求められる視点だと思います。

4. 関係人口から一步踏み込む

(1) 協働（共働）人口と活動人口

その中で、内外という二つに分けること自体に無理があると思いますので、関係人口の観点から少し定住に踏み込んでいく過程にある、「協働（共働）人口」と「活動人口」という言葉に触れてみたいと思います。

その前段として、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトという言葉を取り上げてみたいと思います。ゲマインシャフトは地域・農村に代表される共同体組織のことで、どちらかというと思いや関係性を介したつながり方です。ゲゼルシャフトは機能的な組織のことであり、どちらかというとい人為形成的ですので、お金を介する要素が強いと思います。

このときに、地域で暮らしている主体はゲマインシャフトの状態が多い中で、特に DAO に関しては、ゲゼルシャフトに近い要素で関わろうとするならば、そのあたりをどうやってつなぐのかが大事な要素になると思うのです。したがって、共同体を中心にしたゲマインシャフトと機能体を中心としたゲゼルシャフトをバランスよく共存共栄させることで、この間を取るような要素が必要になるのではないかと思います。

現在、交流人口、関係人口、定住人口という三つの言葉がありますが、私は自分たちの立ち位置を考えたときにどこに当たるのだろうと思うのです。ブラン

チにいる私たち夫婦の動き方や立ち位置としては、夫婦ともどもそこに住民票はなく、主に週末・連休にはいますが、ずっとそこにいるわけではありません。一方で自治会には加入し、町費も払い、地元の行事にはほぼ参加しています。地元団体の役職や役員も担っています。これは一体どういうことかと思うわけです。定住ではないのですが、だからといって関係としては踏み込み過ぎている感じがあったものですから、関係人口と定住人口の間には少し乖離があるということを目にしたのが「協働人口」という言葉でした。

山形県小国町は人口約 6000 人の自治体ですが、その職員である斎藤晃司さんは「小国町人口ビジョンを作ったときに、人口の将来展望は地元に住所を置く人（定住人口）を前提としたけれども、実際はそこに住所を置く人だけでなく、町外から通勤・通学している人や拠点を持っている人などの外部人材も多く活動しており、本町ではそうした人を協働人口と捉えている」と述べています。2040 年には協働人口を 2000 人程度まで増やし、定住の減少による影響を補いたいとしており、私自身の松梅での立ち位置に近いイメージだなと思いました。

それから、関東学院大学の牧瀬稔准教授は「自治体通信 Online」の寄稿記事の中で、「筆者は良い関係人口を活動人口と称しており、活動人口とは地域に対する誇りや自負心を持ち、地域づくりにいきいきと活動する者であると定義している」と述べています。記事の中では簡単なシミュレーションが行われていて、例えば定住人口が 100 人から 80 人に減少しても、活動人口が 20 人から 30 人に増えれば地域の活動人口率は上昇し、それによっていろいろな物事を維持できるのではないかということです。これは定住における活動人口を見ていますが、ここに関係人口が入ってくるとそれをまた補完する意味合いも出てくると思って、関心を持って見ていました。

（２）地域共創コーディネーター養成プログラムの現場から

そうしたことを踏まえて、私に関わった取り組みから協働や共創に係る活動について見ていこうと思います。

まずは、山形県酒田市と鶴岡市にキャンパスを持つ東北公益文科大学で 10 年余り行ってきた地域共創コーディネーター養成プログラムの現場です。このプログラムは、公益文科大学の大学院で公開講座として行われ、今年度も開講しています。そこで 20 代から 80 歳ぐらいまでの 188 人の修了生を出しているのですが、学んで終わりではなく、その後も自分の組織や現場でその学びを生かしています。

その中で、「プロジェクト a」というかなり現場に特化したプロジェクトも組んでいて、これがかなり地域の中に入っていく一つの道筋になってきています。「プロジェクト a」だけではないのですが、地域共創コーディネーターになった

いろいろな修了生が、もちろん自分の組織や地域のこともやりながら、他の地域や組織の依頼を受けるケースもかなり出てきました。そうなるとこのような人たちは先ほど言った活動人口や協働人口にイメージが近くなってくると思うのです。課題解決プロジェクトの運営にプログラム作りから参加していった、実践的な学びをつなげていくと同時に、地域の方からするとそのプログラムに参加して外部との関係づくりをしていくという一つの大きな場ができるわけです。ここに活動人口、協働人口という要素が入ってくると捉えています。実は今、このプロジェクトの修了生のメンバーが中心になって運営主体を法人化しようとしていて、恒常的な活動につなげていこうと考えているところです。

(3) ブランチの今後予想される姿

松梅ブランチの方でも、今後予想される姿があります。先ほどご紹介した耕作放棄地を今年の4月から無償で5年間借りることができ、そこを循環型コミュニティガーデンにしようと考えています。西側半分を循環型コミュニティガーデンにし、東側は先ほどのかかしを立てられるように交流広場として残そうと考えています。向かい側に飛び地があって、そこでは野菜作りをします。

ここで堆肥作りを通じて山と街の間に循環を起こせないかと考えています。福岡市にあるローカルフードサイクリング株式会社が開発したフェルトバッグ型のコンポストは家庭内でも臭いを出さずに堆肥作りができます。実はこれを開発したのは、私の妻の高校の同級生でもある循環型コミュニティガーデン協会のたいら由以子さんです。彼女の協力を仰ぎながら取り組んでいます。

仮に協働人口、活動人口がブランチでの活動にあたるものだとすると、いわゆる定住人口である地域住民の方々と交流人口である市外の住民の方々、そして関係人口である街中の住民の方々と一緒にやるイメージです。例えば街中で堆肥を作っても意外と余ってしまったりするものですから、それを山の方へ持ってきてもらって一緒に作物を作り、できたものをまた分配して、消費されたら堆肥作りに入ってもらって、またそれをガーデンに返すという形で、街と山を循環させる方法を取れないかと考えています。

そして地域の方とのガーデン作りに関しては、現在ガーデンの設計をしているところなので、これが整ったら地域の方向けに説明会・勉強会をしようと思っていて、そこからガーデン作りに参加していただき、外部の方との交流を通じて地域外との関係をつくっていただこうと考えています。

というのも、災害が頻発するようになり、外部との関係づくりが非常に大事になってくるからです。佐賀では令和元年、3年、5年と奇数年連続で災害が起こっています。災害が起こると当然、外部からボランティアをはじめとしたいろいろな支援が入りますが、外部を受け入れる力、いわゆる受援力が高い地域には入

りやすいけれども、そうでないところは、なかなか外との関係が結べないのです。平時から外部の人と一緒に取り組むことによってお互いに慣れていくという意味も含めて、この場が生かされればよいと考えています。

ちなみに循環型コミュニティガーデンは、いわゆる大人の部活というか、サークル的な活動として私たちは位置付けていきたいと考えています。

(4) 留意すべきポイント

このような形で様々な取り組みの中にはその見立て方によって関係人口から一歩踏み込んだようなものになると思っていますが、このときに留意しなければならないと思うポイントが3点ほどあります。

① 何（誰）のためにやるのか

一つ目に、先ほども言ったように、誰のために、何のためにやるのかということです。法政大学の田村明先生が言っていた言葉に、いわゆる内部人材、地域コミュニティの人たちのことを「土の人」と呼び、外部人材、ボランティア・NPOに代表される方々のことを「風の人」と呼び、できれば両者が相まって新しい「風土」をつくってほしいというものがあります。このとき外部人材というのは結果的に誰のため、何のためにやっているのかということになるわけです。もちろん自分の足元のいろいろな関心やテーマ(風)の話や活動もあるでしょうが、最終的にはその話や活動は地元の地域(土)に対して行うという目線が大事ではないかと思います。特に災害支援のときは、相手がいるということをよく考えないといけません。自分たちがやりたいことをするわけではないので、そうしたところは気を付ける必要があるでしょう。

また、福岡の郷土史家である中島忠雄先生は、氏神に氏子たちが心を寄せ合う姿が「まつり」の原点だとよくおっしゃっていました。氏神の下で氏子たちが何か楽しそうだとすることで村人が集まり、そこにまつりのスタイルが生まれるというのです。今風にいえば、「氏神」は目的やミッションやコンセプトに当たり、「氏子」は役員やスタッフ、会員、「村人」は住民や参加者、ゲスト、「まつり」はイベントや事業、NPOに相当するでしょう。

このときにかなり重要なのは、「氏神とは何か」ということです。何の目的に対して皆さんが心を寄せ合うのかがとても重要だということです。自分の中にある正直な目的はそれぞれ持っているかもしれませんが、DAOも含めて地域の中で誰のために、何のためにやっているのかを常に確認し合いながら、共有しながらやっていくことがとても大事なことなのです。

② 相手をリスペクトできるか

二つ目の留意点は相手をリスペクトできるかどうかということです。外から

関わる際は、言うまでもなくその地域そのものです。もちろんできること、できないことがいろいろある中で、その土地に長年暮らしてきて、いろいろなことが起こりながらも春夏秋冬生き抜いてきたということがあるので、そうした営みをわれわれはどのように大切に捉えることができるかということです。

ちなみに私は転勤族だったこともあるので、新しい地域に入る際には三つのことを知ることが大切と思っています。

一つ目は「人を知る」ことです。誰が何をやっているかということです。もっと言えば、まず誰にあいさつしなければならないのかということから始まって、まず人を知ることがとても大事です。私たちも松梅に入るに当たって、まずは松梅に関わるいろいろな人に間に入ってもらい、どの順番でどういうあいさつをするのかを大事に考えました。

二つ目は「歴史や経緯を知る」ことです。なぜそんなことをしているのかということです。井手地区においても、住民のほとんどが天満宮の氏子なので、コロナ禍ではいろいろ行事ができないことはあったけれども、氏子としての動きを一番大事にしていたわけです。清掃活動はちゃんとやろう、規模は小さくしてもお日待ちや伊勢講などの行事ごとはちゃんとやろうという、その背景を知っておくことが大切です。私が松梅学という取り組みに少しだけ関わる機会をいただいたのも、そうした歴史や経緯をいろいろと知ることができるからで、地域の背景を共有することはやはり大事なことだろうと思っています。

三つ目は「地理を知る」です。どこに何があるかということです。松梅では、まち協の事業として毎年カレンダーを作っています。地域の人たちが撮った写真をベースに自主制作をしていて、地区住民には無料配布し、外部から欲しいと言われれば1部1000円で売っています。一番後ろに名刺広告の欄があって、そこに松梅地区の地図があるのですが、私たちが松梅に最初に来た頃はこの地図が非常に重宝してありがたかったです。何よりも地名を読み間違えると大ごとになるので、そういうことを一つ一つ知っていくことは周りへのリスペクトへの一歩として非常に大切なことだと思っています。

③ 対話ができるか

最後は対話です。これは自戒も込めてですけども、ちゃんと話ができるかということは大切です。「共働」という言葉は、一般的には協力の「協」を書きませんが、私が住んでいる福岡市では総合計画などに「共」の字を使っており、みんなと一緒に取り組むという意味を込めて「共働」を採用しています。

共働というのはいきなり始まるものではなく、物語でいえば起承転結の「転」の部分を語るようなものです。「桃太郎」でいえば、いきなり鬼が島の話が始まるのではなく、桃太郎とは何者かという話から始まるわけです。話には段取りが

あって流れがあるわけです。

では、共働に向けて最初の「起」で何をしているかということ、まずは「共有」です。自己紹介からスタートして、情報や経緯などいろいろなことを共有していきます。その中から接点となる「共感」が生まれ、それが人を結び付ける連結器になり、一緒にやりましょうという「共働」の機運が生まれてくるのです。ところが今は、スピードや成果を求めることが増えてきて、手前の橋である「共有」と「共感」のプロセスを省略して、いきなり共働しようとすることも結構あって、これはなかなか難しいと感じるわけです。

例えば、皆さんの家の隣に誰かが引っ越してきて、翌日玄関のドアをトントンとたたかれて「よろしく」と言われても、「あなた、誰？」から始まるでしょう。どこから来たのかを知って、悪い人ではなさそうだと判断するところから事は始まると思います。この手前の橋（共有と共感）をつなぐ役目を果たすのが「対話」だと私は思っています。

対話は、聴くことと話すことの掛け算です。双方が出し合うことが非常に大事で、相手の話を聴き放しでもなく、自分が言い放しでもなく、相手の状況も知ることも必要ですし、こちらのことを知ってもらうことも必要であり、そういうやりとりをすることが大事なのです。

ご承知のように、今は「共働」だけにとどまらず、一緒に何かを生み出し、新たな意味付けや価値づけをする「共創」という言葉も出てきました。また、共働を「ともばたらき」と読んだらもっと分かりやすくなって、身近な人たちの関係性が少し見え隠れすると思います。

そして、共有と共感から関係を構築し、共感から共働に向かう中で相互理解を図り、共働から共創を通じて価値を創っていくという一連の流れの中に、対話というものがどうしても欠かせないものだと思います。

さらに、私は地域における共働というのは、内部と内部の共働（地域内共働）、内部と外部の共働、そして外部同士の共働（支援者や関係者同士の共働）の3点セットで初めて地域が動いていくのだろうと捉えています。

自宅や学校・職場を中心にして、いろいろな外部の人たちの関係を広げながら、最終的にはサードプレイスやフォースプレイスなどいろいろなものを織り交ぜながら、縦横無尽に越境していくという意味での DAO は重要だとは思いますが、その越境の仕方、段取り、作法のようところは気を付けながら活動することがお互いに大切なことだろうと思います。

【質疑応答】

Q：また今日も新たな一面をお伺いすることができました。松梅ランチの話をはじめとして、ファシリテーターとしてご活躍されているバックグラウンドとなる考え方から、DAO に関してどういう視点から考えていくのかということについてサジェスションをいろいろ頂いたと思います。今日お話しいただいた点について皆さまからご質問等頂ければと思います。

Q：非常に楽しいお話をありがとうございました。例えば、ある地域において通勤・通学してくる人たち以外の方々を引き込もうとしたときに、最近ではソーシャルメディアやネットなども活用できることがあると思うのですが、そのあたりについて教えていただければお願いします。

A：松梅ランチには私たち夫婦以外に友人知人が気軽に訪ねてきて、一緒に草刈りをしたり、何かといろいろ手を貸してくれることがあります。SNS などを生かした例としては、先ほどもご紹介したトークフォークダンスがあります。このとき、地元の人々の参加者が足りないので外部の人を呼ばなければならなくなり、口コミだけでなく Facebook などさまざまな媒体を使って「良かったら来ませんか」と呼びかけたら、多くの方々に来ていただきました。ですから、そういうチャンネルの開き方はあると思っています。

Q：そのときに、やはり Facebook になってしまうのだろうかというところが気になっています。日本では Facebook は年代的に中高年層が比較的使うメディアですが、若者は Instagram や動画系の TikTok をよく使う傾向があります。そのあたりで SNS の種類による有効性について何かお気づきがあれば教えてください。

A：おっしゃるとおりで、このときは年配の方々を集めようとしていたので、われわれが慣れている Facebook を多く使い、インスタはあまり使いませんでした。ターゲットがもう少し若い年代であればインスタになると思います。逆に妻が学生たちとかかし作りや防災キャンプなどで声を掛けるときには LINE などを使って連絡を取っているのも、それぞれの相手を使い勝手のいい媒体を使い分けているのが実際のところですね。

Q：DAO はデジタルを使うことが定義されていたりするのですが、この言葉は分散型自律組織という意味なので、デジタルに限らないところもあります。デ

デジタル技術でなくても分散型自律組織の形は考えられるのでしょうか、それとも難しいのでしょうか。

A：これからの方向性や実際に運営する世代を考えると、デジタルが一つの通常姿になるだろうというのは予測しています。ただ、クラウド的なデジタルの部分でやっている者同士の関係性がよく分からないという声がありますし、地域の側が世代的にそういうことがわからないことから始まって、生かせる部分と生かせない部分があるとすると、お互いに関係を結びにくくなると思うので、デジタルだけでやっても定着しないだろうと思っています。

ですから、アナログのところに関係を持った上でのデジタルならばまだ移行できると思います。デジタルに慣れない世代と普通に使っている世代の間で学び合う場をつくったり、お互いの強みも弱みも認識して補完し合える関係性ができれば、自律分散的な基盤として機能すると思います。ここに関わっている人は誰かという最低限の面識を持って、少なからずキーパーソンとはつながりを持っていないようにしないと、勝手に外から何かされていると言われてもめってしまったら本末転倒になってしまうので、それは避けたいと思っています。

Q：協働人口、活動人口というのは大変興味深くて分かりやすいお話だと思っていますし、関係人口の場合は観光もあれば、二地域居住や副業といったものも含まれますが、やはり地域は基本的に定住人口を増やしたいと考えていると思うのです。しかし、観光から定住につながるのはかなり難しく、観光は季節的であり、観光業自体に常勤の人が少ないので、全国で観光が定住につながっている事例は非常に少ないと思います。関係人口や協働人口、活動人口から定住人口につなげるにはどうしたらいいのでしょうか。

A：恐らく観光から定住につながっている方々は、少なくとも物見遊山的な観光をしているわけではなく、体験型を中心に長期間、あるいは接点頻度が高い関わり方をして、地元から少なからず役割を持たされているような状態であり、それを仕組みしたものの一つが地域おこし協力隊だと思っています。

観光ではない形で関わりを持つとするならば、私たちの日々の暮らしの中に直接関わってもらうことになると思いますし、完全な定住となれば家、場所が必要になります。しかし、地域によっては「家を貸す」という発想がほとんどなかったり、なかなか売りに出されないというケースが結構多いので、地域の側がどれだけオープンにできるかということもポイントになります。一方で、外部の人がやたらと増えてもらっても困ると言う話もあるので、訳の分

からない人たちが増えるぐらいだったら人口は増えない方がいいと思っ
ているぐらいなので、コミュニティのニーズや形成過程の中にどのようにソフト
ランディングしていくかが重要になるでしょう。

われわれの松梅ブランチはひょっとしたらそういう緩衝材のような役割を
少なからず果たしていると感じています。うちに来ている人の中で2組ほど、
松梅のどこかで家が空けば買いたいと言っている人がいるので、地域の方々の
気持ちに気を付けながら声かけをしているところです。

Q: 松梅地区での活動についていろいろお話を聞いて、この地区は元々いろい
ろな活動をしっかりと行っている地域であるということが垣間見えたのと、そ
こにうまく加留部先生がご夫婦で入られて、そこが拠点になって外部のいろ
いろな方々が関わってこられたということがよく分かりました。その動きと
いうのは、それ以前はあまりなかったけれども見られるようになったのでし
ょうか。それによって地域の人たちにも変化が見られるようになったのでし
ょうか。

A: 井手地区を始め地域の方々からは「あなたたちが来てから随分明るくなっ
た」とよく言っていただきますし、妻もいろいろ活動しているので、地元の女性か
らは「ものが言いやすくなった」と言っていただいたりします。それだけ私た
ちが何をしているか、地域にどれだけ顔を出しているかというのは皆さん結
構よく見ていますし、地域との関わりの中で、地域にとってはもやもやしてい
た部分を小さいことから一つ一つ解決したことによって、皆さんの印象が良
くなっていったのだと思います。恐らく、私たちをいい「だし」にして次に進
めたいと思っている人は少なからずいるとは感じています。

Q: 加留部先生はこれまでもいろいろな経験があるので、そういう方向に作用し
ていくだろうと計算しながらやっていた部分はあると思います。東北公益文
科大学の教え子たちがファシリテーションで地域を変えていくために、卒業
後いろいろな地域に入って活動されていますが、学生さんたちが加留部先生
の教えを受けて、加留部先生と同じところまでは到達しなくても、そのよう
な働きかけを地域で行っているという動きはかなり見えてきていますか。

A: ファシリテーションはどうしてもスキルの形で取り上げられるのですが、や
はり在り方が重要です。ファシリテーションという言葉のそもそものは「容易に
する、～しやすくする」という意味です。私は、しにくい状態をしやすい状態
に変えることと捉えていて、究極的には生きにくい世の中や地域を生きやす

い状態に変えることだと思っています。私が言うと大変おこがましいのですが、その1点は結構皆さんに腹落ちしていただいています。

今までであれば地域内で言いにくかった、動きにくかった、やりにくかったことを、こちらが力をかけるかどうかはともかくとして、本人がそれをいかにイージーな状態にするのかという視点だけはちゃんと持ってくれているなど感じています。皆さんが生きやすい状態というのは、SDGsでよくいうところの「取りこぼさない」という意味もありますし、いろいろなやりにくさがやりやすさに変わったりすることだと思っています。明るくなったというのはその中の表現の一つかなと思ってうれしかったのですが、そういう状況を皆さん少なからず持っていたいただいていると感じています。

Q：地域づくりや地方創生全体もそうですけれども、生きやすくするという思いを持つことが目標であり、そうしたものを地域で具体的に設定して、それに向けてみんなが協力していくことがとても大切なのだと思います。うまくいっていると思える地域は大体、今言われたようなことが実現に向かって踏み出せているところだと思いますので、そのことを言葉として明確に表していただいて私としても大変助かりました。

今日は大変短い時間で、本当はもっと時間があればいろいろとお話しされたいことがあったかと思うのですが、今日聴いた中でも大変重要な示唆をいろいろといただいたと思います。加留部先生、どうもありがとうございました。

A：改めてありがとうございました。私自身も言語化する機会を頂き、大変助かりました。

多様な主体と共創する まちづくりに向けて

～ 関係人口と定住人口の連携・協働の今後の展開とその可能性 ～



NPO法人日本ファンダシオン協会 フェロー／九州大学大学院 統合新領域学府 客員教授 加留部貴行

【0】 はじめに（自己紹介）

本日の内容

0. はじめに（自己紹介）

1. 今、松梅ランチで起こっていること
2. 地域目線で「DAO（分散型自律組織）」をどのように捉えるのか
3. 関係人口から一歩踏み込む「協働（共働）人口／活動人口」へ
 - ・東北公益文科大学
 - 「地域共創コーディネーター養成プログラム」の現場から
 - ・松梅ランチの今後予想される姿から
 - ・留意すべきポイントあれこれ

4. 質疑応答

Copyright©2025 Takayuki Karube All rights reserved.

自己紹介



加留部 貴行（かるべ たかゆき）

1967年生まれ（58歳）

福岡県宮若市出身／山口県下関市生まれ

現在、**福岡市**と**佐賀市**の2拠点生活

妻と2人暮らし



Copyright©2025 Takayuki Karube All rights reserved.

これまでの経歴【オフィシャル】

- 1990年 西部ガス(株)入社
 - ・人事(7年/採用、人事、給与、処遇制度)
 - ・営業(4年/ガス空調営業・北九州エリア)
- 2001年 福岡市に派遣(2年半)
 - ・山崎広太郎市長の公約事業政策スタッフ
(福岡市NPO・ボランティア支援推進専門員)
- 2004年 西部ガス復帰
 - ・人事(1年/ライブラリ支援・新規雇用開発)
 - ・新規事業(2年/指定管理施設運営)
- 2007年 九州大学に Outreach
 - ・大学評価情報室(1年半/大学改革プロジェクト)
 - ・ユーザーサイエンス機構(1年/学内外プロジェクト)
 - ・統合新領域学府(2年/アシリテーション導入を
通じた教育プログラム開発)
- 2011年 独立して現在に至る(加留部貴行事務所AN-BAI代表)

Copyright©2025 Takayuki Karube All rights reserved.

現在の主な活動 ■現職(2025.7.1現在)

- 加留部貴行事務所AN-BAI 代表
- 九州大学大学院 統合新領域学府 客員教授
(他に、鹿児島大学/熊本大学/明治学院大学/東北公益文科大学など)
- 特定非営利活動法人 日本ファシリテーション協会(FAJ)フェロー
- 特定非営利活動法人 よこはま地域福祉研究センター 理事
- 特定非営利活動法人 北九州育ちと遊びのエンバフメントネットBee 理事
- 福岡県NPO・ボランティアと企業、行政との協働実践会議 委員
- 福岡市共創による地域づくりアドバイザー
- 福岡市行政評価委員会 会長
- 大野城市生活支援体制整備第1層協議体 会長
- 糸島市市民提案型まちづくり事業 審査委員長
- 小城市総合計画市民参画アドバイザー
- 朝来市総合計画市民参画アドバイザー
- 総務省地域づくり人材の養成に関する調査研究会 構成員
- 厚生労働省生活困窮者自立相談支援事業
従事者養成研修事業 企画運営委員会 委員
- 自治体人材マネジメント・ラボ 幹事

Copyright©2025 Takayuki Karube All rights reserved.

これまでの経歴【プライベート】

親が転勤族(山口~広島~大分)だったため、「土着」に憧れて大学から九州・福岡へ。学生時代(1987年)に出会った「大分県一村一品運動」からまちづくり活動に入り、西部ガス入社後も活動を継続。時代と共にボランティア、NPOの活動へ拡大。

- 1988(～2003)年 インターユースふくおか(IVF)
- 1999(～2005)年 北九州青年みらい塾
- 2000(～2003)年 特定非営利活動法人NPOふくおか
- 2002(～2021)年 認定特定非営利活動法人
日本ボランティアコーディネーター協会(JVCA)



- 2003年(～現在) 特定非営利活動法人
FAJ 日本ファシリテーション協会 (FAJ)
- 2006年(～現在) 社会福祉法人
大野城市社会福祉協議会 ボランティアセンター運営委員会



人がイキイキと暮らしていくことができる

「身の丈の地域社会づくり」を追いかけ続けています。

Copyright©2025 Takayuki Karube All rights reserved.

現在の主な現場

企業、大学、行政、NPOの4つのセクターを経験している
「ひとり産学官民連携」を活かした共働りアシリテーションを実践

- 会議運営 (審議会・委員会、シンポジウム…)
- 教育研修 (研修、授業、学びの提供者向け…)
- 多職種連携 (プロジェクト支援、職場活性化…)



『参加しなくなる会議のつくり方
～公務員のためのファシリテーション入門』
(ぎょうせい) ※絶賛発売中!



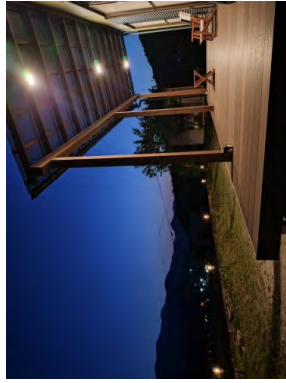
【最新刊】『地域共創のつくり方』
(共編著・北樹出版) ※絶賛発売開始!

Copyright©2025 Takayuki Karube All rights reserved.

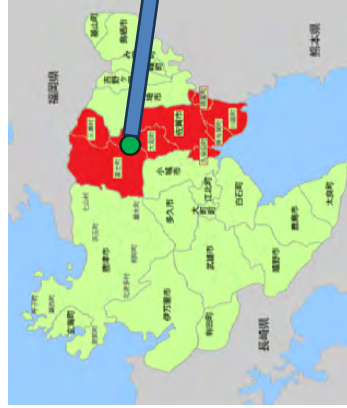
【1】 今、松梅ブランチで 起こっていること

松梅
ブランチ

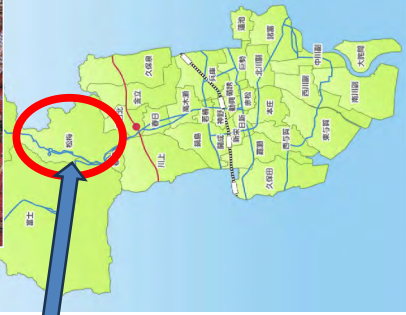
「松梅ブランチ」の日々



松梅地区（佐賀市大和町）



大字松瀬、大字梅野、大字名尾のエリアで構成される佐賀市内の小学校区では最も人口が少ない(約840人)広域限界集落で19の単位自治会がある。



松梅
ブランチ

「松梅ブランチ」位置図



松梅プランチ取得経緯

- 2022年** 3月 「第3の拠点」構想スタート
- 8月 NPO法人空家・空地サポートSAGAから空家物件紹介
- 12月** **土地・建物取得**
- 2023年** 2月 自治会長ご挨拶
- 4月 井手自治会加入～以降常会参加
- 5月 松梅プランチ空間設計スタート
- 7月 松梅まちづくり協議会ご挨拶
- 10月 松梅かかしまつり かかし設置
リノベーション着工
- 12月 松梅プランチ竣工
- 2024年** **1月** **「松梅プランチ」オープン**
- 3月 テラス完成
- 2025年 4月 循環型コミュニティセンター用地借入(5年間/無償)
- 10月 松梅プランチ 囲炉裏部屋「葉隠庵」オープン(予定)
- 2026年 春 循環型コミュニティセンターオープン(予定)



■井手地区位置図

- ・23戸
- ・ほぼ高齢者
- ・空家2件あり





リノベーション後【2F】2024年1月1日オープン



サード&フォースブレイスパーク

心地よいつながりと成長の場

地域のくらし×対話と学び×社会活動

【原則、土日祝休日開放】



囲炉裏部屋
まもなく
竣工予定

竣工予定



おやご写真教室 TOUCH! vol.2 in松梅

2024年7月28日(日) 9:00~12:00

松梅在住の親子と松梅以外に住む親子と一緒に楽しめるイベントをやりたいという地元住民からの持ち込み企画で開催

当日は松梅内外から9組の親子22人が参加。佐賀市在住の写真家・刑部(おさか)信人さんがナビゲート。松梅プランチ周辺を1時間余り巡ります。ことたちは気になったものを撮ってきます。



撮った写真をスクリーンに映し出し、何が気になり、どんな気持ちで撮ったかなどを同いながら紹介し合います。



松梅ランチ・カフェ

2024年9月8日(日) 13:00~15:00

地区体育祭の後、松梅在住の親子と松梅以外から通う親子と一緒におしゃべりできる場をつくりたいという地元住民からの持ち込み企画で開催。当日は近隣の住民のみなさんもプランチ見学を兼ね多数訪問いただきました。



大変好評につき、今後も不定期に開催予定/夜には「ちこバー」もオープン予定

かかしまつり（佐賀市大和町松梅地区）

松梅地区では近年、福利りが終わった田んぼを活用し、「かかしまつり」で賑わいます。
（毎年10月23日～11月23日開催）

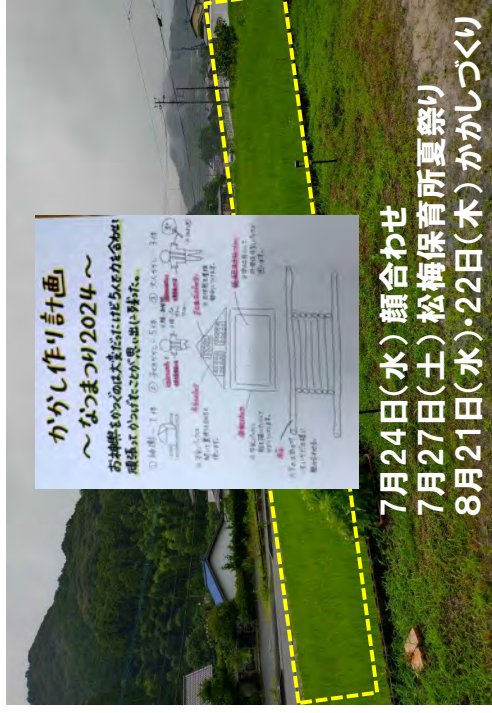


Copyright©2024 Takayuki Karube All rights reserved.

2024年は 松梅保育所×佐賀大学×まちづくり協議会で 「かかしづくり」をしました



2024年は 松梅保育所×佐賀大学×まちづくり協議会で 「かかしづくり」をしました



2024年は 松梅保育所×佐賀大学×まちづくり協議会で 「かかしづくり」をしました



松梅かかしまつり

2024年10月23日(水)～11月23日(祝)

2024年は、松梅保育所×佐賀大学×まちづくり協議会で
松梅ランチ前の場所を借りて「かかしまつり」をしました



第1回 松梅もちつき大会

2024年12月8日(日)／通天寺



通天寺と松梅ランチで実行委員会をつくって
8升のもちをつきました。地域の保育園児や小
中学生も含めて50人ほどが参加。つきたての
餅をきなこや大根おろし、生醤油と海苔などの
お好みで大変美味しくいただきました。



松梅しゃべり場 ～いろんな大人と話してみよう

2024年11月8日(金)／佐賀市立小中一貫校松梅校



80人近くの生徒が小1～4、小5・6、中1～3の3つ
のサークルに別れ、同数の多様な大人(保護者、地
域住民、市外在住者など)と1対1で対話しました

女性のからだをまもるための研修会

2025年6月1日(日)／松梅公民館



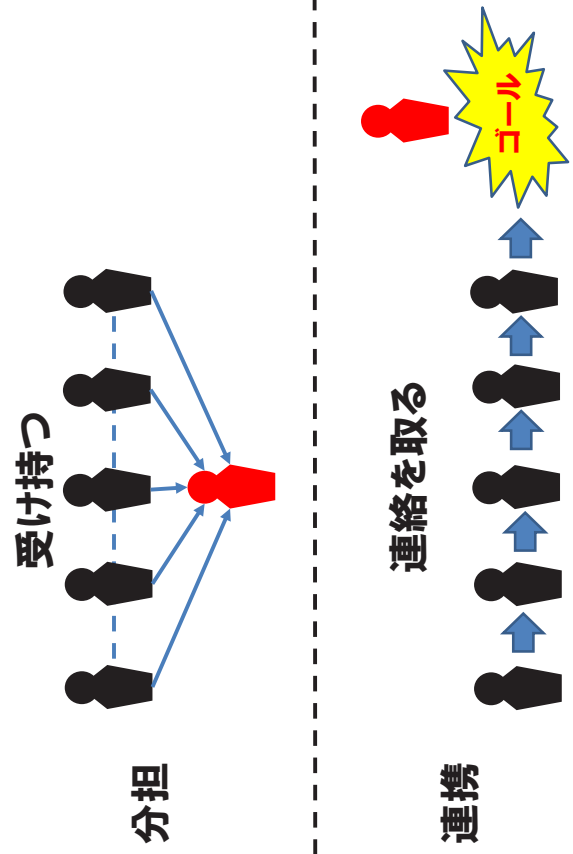
【2】 地域目線で 「DAO（分散型自律組織）」 をどのように捉えるのか

地域目線からの「DAO（分散型自律組織）」への「？」いろいろ

- ①まず、あなたは誰（何）ですか？
- ②これって誰のために・何のためにやるのですか？
…もちろん「地域起点」ですよ？
- ③勝手に決めたり進めたりしませんよね？
…面倒くさがらずに対話しますよね？
- ④いつまで・どこまで関わるつもりですか？
…中途半端にいなくなることないですよ？
- ⑤どこまで本気ですか？
…やりっぱなしにしませんよね？



Copyright©2025 Takayuki Karube All rights reserved.



Copyright©2025 Takayuki Karube All rights reserved.

人を管理して「仕切る」だけではなく、 人を支援して「自発性」を促す

【図表】管理と支援の本質的な違い（出典：館岡雄雄氏「利他性の経済学」より）

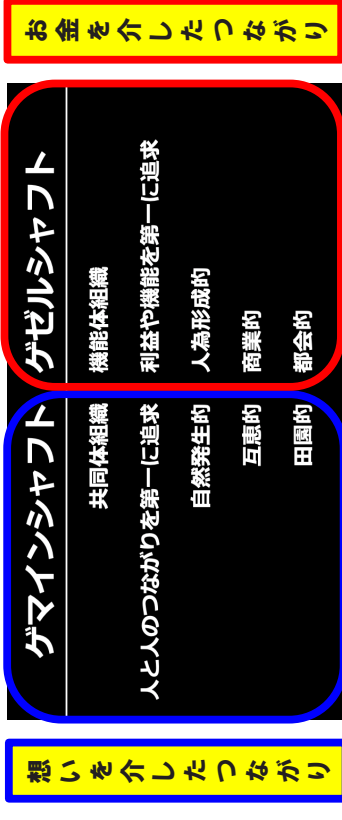
関係者	行動様式	管理	支援
外部	行為者	自分のことを知らせて(計画) 相手を変えることによって、自分の意図をはたす。	相手のことを知って、自分を変えることによって、相手の意図を果たす。
内部	被行為者	相手のことを知らされて(計画) 自分を変わらせられることによって、相手の意図を果たさせられる。	自分のことを知ってもらって、相手に変わってもらい、自分の意図が果たされる。

目的に合わせ「管理」と「支援」のバランスを取る

本質的な違いとは：管理は自分から出発して相手を変える行動様式
支援は相手から出発して自分を変える行動様式

Copyright©2025 Takayuki Karube All rights reserved.

【3】 関係人口から 一步踏み込む 「協働(共働)人口 /活動人口」へ



人びとが『より良い生活』として生き、『より良い生活』を生き活きと営むために、今こそ**ゲゼルシャフト**に対抗できる**ゲマインシャフト**の再構築の必要性を見直すべき。併せて、**ゲゼルシャフト**と**ゲマインシャフト**間の活動を縦横に連携することが重要。つまり、もう一度「共同体を中心とした**ゲマインシャフト**」と「機能体を中心とした**ゲゼルシャフト**」を共存共栄させることで、人間一人ひとりが持つ様々なニーズを満たし、生きやすい社会をつくり上げることが可能となるのではないが。

Copyright©2025 Takayuki Karube All rights reserved.

交流人口
関係人口
定住人口

Copyright©2025 Takayuki Karube All rights reserved.

■松梅ブランチにおける私たち夫婦の動きと立ち位置

- ①夫婦共々住民票は置いていない
- ②主に週末・連休だけいる
- ③自治会には加入し、町費は支払っている
- ④地元の自治会行事などにはかなり参加している
- ⑤地元の団体等の役職・役割もなぜか担っている
(松梅防災会顧問、体育協会委員、松梅学企画委員など)



これって、どういうこと？

Copyright©2025 Takayuki Karube All rights reserved.

交流人口 関係人口 協働人口 定住人口

協働人口



小国町(おくにまち)は、山形県の南西部にある人口6,207人(推計人口、2025年6月1日)の町。面積が山形県内で2番目に大きい自治体。その約90パーセントには、ブナなどを中心とした広葉樹の森が広がっており、美しい四季のうつろいを見せてくれます。また、全国有数の豪雪地帯であり、降り積もった雪が、多様な生命を育む源泉となっています。町を象徴する二つの素材である「ブナ」と「雪」から共通してイメージできる「白」を基に、町全体を“白い森”と表現しています。(小国町ホームページより)



Copyright©2025 Takayuki Karube All rights reserved.

協働人口

4. 町外からまちづくりに関わる人々『協働人口』

小国町人口ビジョンでは「人口の将来展望は『小国町に住所をおく人』(定住人口)を前提としたものです。(中略)実際には小国町に住所をおく人ばかりでなく、**町外から本町の企業に通勤してくる人や町外から小国高校に通学する生徒、大学の研究やゼミで本町をフィールドとして活動している学生など、外部人材を含め、多くの人々が本町で活動しています。**

(中略)本町ではこうした人々を『**協働人口**』と捉え、小国町に住所をおく人との協働、交流、連携を図っていくことも、今後の『まち・ひと・しごと創生』に向けた重要な視点であると考えます。このため、このような方向に基づいたまちづくりの展開により、**2040年には『協働人口』を2,000人程度まで増やし、定住人口の減少による影響を補い、活力と魅力がふられる持続可能なまちづくりを目指していきます』**としています。

『協働人口と住民が共に創る地域～住民が誇りを持てる地域にするために～(山形県小国町 斎藤 景司)』より

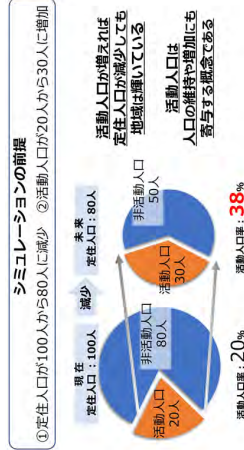
Copyright©2025 Takayuki Karube All rights reserved.

活動人口

「活動人口」という概念

筆者は「良い関係人口」を「**活動人口**」と称している。活動人口とは「**地域に対する誇りや自負心を持ち、地域づくりにいきいきと活動する者**」と定義している。活動人口を増やしていくことが、人口が減っても元気で、価値ある地域になると考えている。

簡単なシミュレーションをしてみよう。現在と未来があり、定住人口が100人から80人に減っていく。しかし、活動人口が20人から30人に増えれば、地域における活動人口率が上昇する。これが「人口が減っても元気で、価値ある地域」を意味する。



〔自治体通信Online 寄稿記事〕齊藤景司「シビックプライド(2)より」(関東学院大学法学部准教授/社会情報大学院大学特任教授・牧瀬 稔氏)

Copyright©2025 Takayuki Karube All rights reserved.

循環型コミュニティガーデンづくり

松梅プランチ南側の道路に面した土地と道路を挟んで向かい側に
ある三角形の小さな土地の2カ所を無償で5年間お借りします。



大きめの土地の

西側半分は循環型
コミュニティガーデン
(花、ハーブ、薬物野菜など)

東側半分はかかしまつり
のかかしも立てられる
交流広場

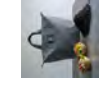
小さな土地は
主に野菜作り(根菜など)

堆肥づくりを通じて
山と街の間に循環を起こす



交流 関係 協働 定住

市外
住民



街中
住民



地区
住民

堆肥づくり～ガーデンづくりに参加
消費 ← 作物の分配

循環型
コミュニティ
ガーデン

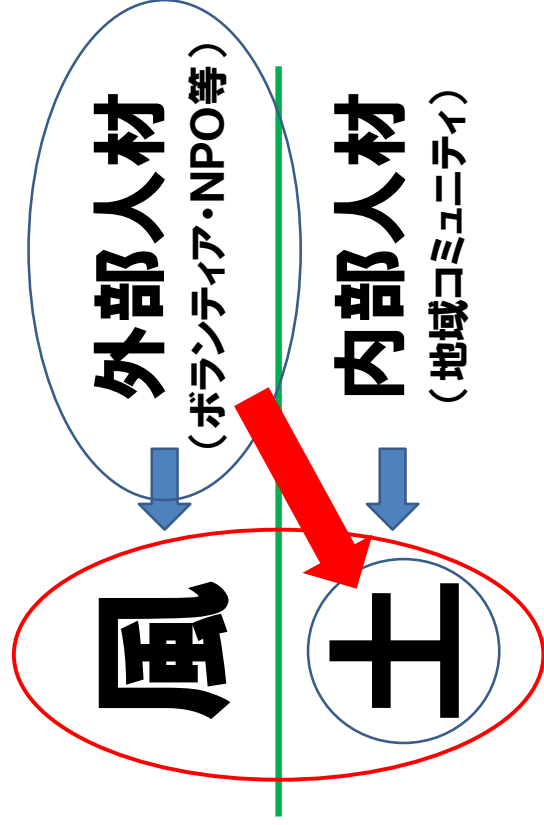
ガーデンづくりに参加
外部との
関係づくり

サークル(大人の部活)的活動へ

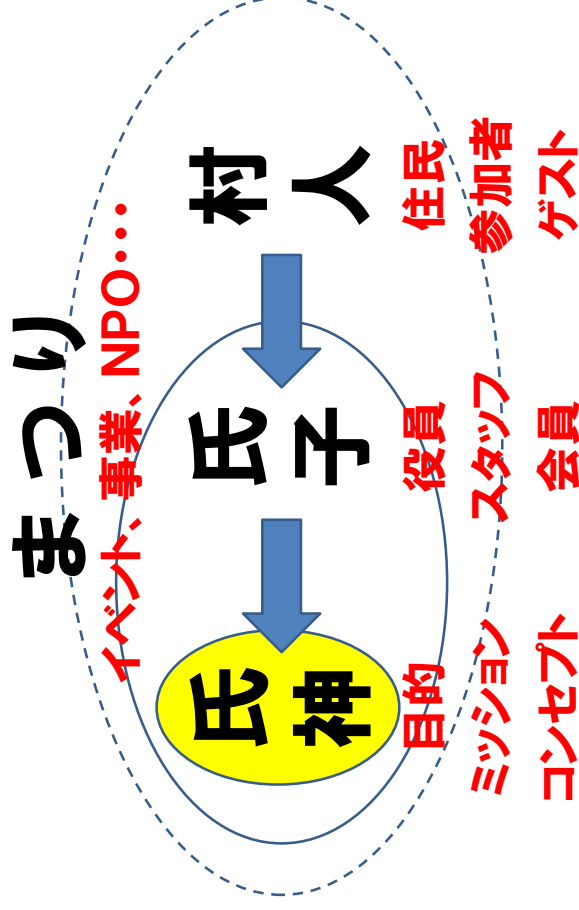
Copyright©2025 Takayuki Karube All rights reserved.

留意すべき
ポイントあれこれ

【1】
何(誰)のためにやるのか



Copyright©2025 Takayuki Karube All rights reserved.



Copyright©2025 Takayuki Karube All rights reserved.

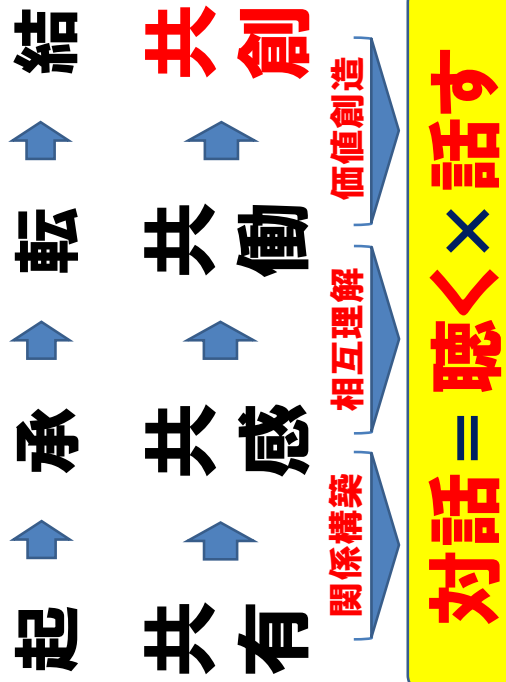
地域に入って知って知ってほしい3つのこと

- ① 人を知る (誰が何をやっているのか)
- ② 歴史・経緯を知る (なぜ、それをやっているのか)
- ③ 地理を知る (どこに何があるのか)

Copyright©2025 Takayuki Karube All rights reserved.

【2】
相手をリスパクトできるか

【3】 対話ができるか



起 → 承 → 転 → 結

共有 → 共感 → 共働 → 共創

共共共…
生育同…

対話 = 聴く × 話す

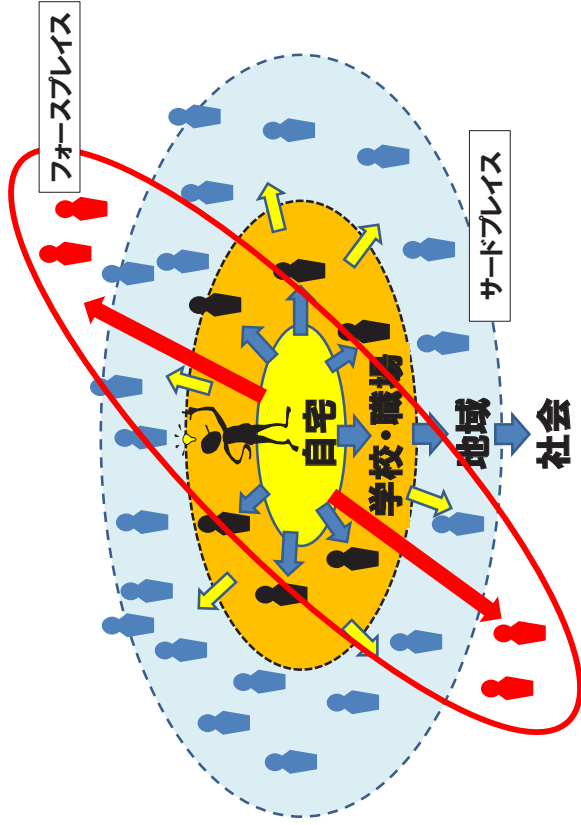
共働(協働)は3点セット

内部 × 内部

内部 × 外部

外部 × 外部

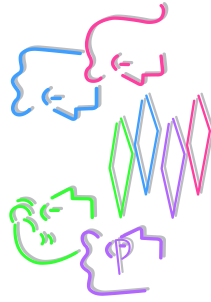
同心円状に広がるあなたの**面識(ネットワーク)**と**関係性**をさらに縦横無尽に**越境**して、対話によって融合していく



地域社会における連携・協働に関する研究会

多様な主体と共創する まちづくりに向けて

～ 関係人口と定住人口の連携・協働の今後の展開とその可能性 ～



【4】 質疑応答